

第1回

新宿区次世代育成協議会部会

平成24年7月31日（火）

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

1 開会

○福富部会長

開会挨拶

2 第四期新宿区次世代育成協議会 部会委員紹介（自己紹介）

<名前と所属、簡単に部会への抱負など自己紹介を行った。>

3 平成24年度部会テーマの検討

○事務局

<事務局による資料確認>

○福富部会長

説明をお願いします。

○事務局

資料1の事業の概要を比較した表から御説明します。

まず、児童館、学童クラブ、放課後子どもひろば、3つの事業の根拠です。児童館、学童クラブについては、児童福祉法と条例に基づいた事業です。放課後子どもひろばは、社会教育法第5条とあります。これは、主として学齢児童に対して放課後、学校その他適切な施設を利用して学習その他の活動の機会を提供する事業の実施という、非常に曖昧模糊とした規定で、実質的には国の要綱を受けた区の要綱で実施しています。そういう大きな違いがあります。

目的です。児童館については、法律等に基づいて、健全な遊びを与えて、健康を増進し、情操を豊かにすること。学童クラブにつきましては、保護者が就労等により昼間いない児童に遊びと生活の場を与えて、児童の健全な育成を図る。放課後子どもひろばについては、遊びによる子どもたちの身体能力やコミュニケーション能力の育成と、学習の機会を提供することによって学ぶ意欲を育む。また、地域交流の推進をはかるという大きな目的があります。

対象です。児童館については、0歳から18歳未満の児童とその保護者を対象としたもの。学童クラブについては、小学校1年生から3年生までの児童で、保護者が、就労等により昼間家庭にいないお子さん。特に配慮を要するお子さんについては、新宿区の場合は6年生ま

でお預かりをしています。放課後子どもひろばは区内の小学生、1年生から6年生までのすべてを対象としているということです。

内容ですが、児童館については、子どもの指導、行事、その他健全な育成及び相談に関することで、遊戯室、音楽室、図書室などで自由に遊んだり、講座や行事への参加というようなことで過ごしています。中高生スペースのある児童館もあります。また、乳幼児専用のスペースがある児童館もあります。いわゆる地域のお子さんだれもが気軽に遊びに来られて、自分らしく過ごせる場を目指しています。

学童クラブですが、大きな特徴は、保育園とか学校とは違い、年齢別のクラス編制をしていません。みんな一緒です。1年生から3年生まで全員一緒に生活をします。遊びと生活の場の提供、遊びを通じた集団指導、生活指導ということで、異年齢の子どもたちの集団生活や遊びを通して自立に向けた指導も行っていくということです。

放課後子どもひろばは、そうした指導的な要素がやや薄くて、自主的な遊びの支援に関する、自主的な学びの支援に関するということです。登録はしていただきますが、小学生が自由に自主的に活動する遊びと学びの場ということです。細かいことについては、各ひろばに設置しているひろば連絡会で、様々な内容について連絡調整を行っています。学校から直接参加することもできますし、家に一回帰ってから参加することもできるという形になっています。

利用料についてです。児童館は無料、学童クラブはおやつ代2,000円を含んだ月額6,000円、延長保育の場合は月額2,000円までの延長があります。放課後子どもひろばは、基本的には無料で、年単位で保険料200円をお支払いいただいています。

利用時間等についてです。児童館の場合は年末年始以外、土日も含めてすべてやっています。基本的には平日午後6時まで、土曜日については午後7時まで。児童館は、直営館、指定管理館、子ども家庭支援センターに設置されている児童コーナーの3種類あります。指定管理館は土日も含めて毎日6時までやっています。区直営の児童コーナーは、子ども総合センター、榎町子ども家庭支援センター、信濃町子ども家庭支援センター、中落合子ども家庭支援センターがありますが、中落合を除いた3センターは中高生専用ルームがあつて、中学生は平日は7時まで利用できるようになっています。

設置状況です。全部で20館、直営館が9館、指定管理館が7館、子ども家庭支援センター内児童コーナーが4館で、27年度までの実行計画で、指定管理化を進めています。27年度には直営館が3館、指定管理館が12館。1つの児童館を子ども家庭支援センター化しますので、児童コーナーが5館という形になります。総数は変わりません。

学童クラブは、直営10所、委託16所ですが、直営の学童クラブは午後6時まで、委託学童クラブは午後7時まで延長利用できます。夏休み等については直営は午前9時からですが、委託は午前8時からの利用ができます。学童クラブは日曜日はお休みです。27年度までの第二実行計画で全所委託する予定になっています。そのほかに民間学童クラブが3所ありまして、利用料、時間帯等、各クラブによって異なります。民間学童クラブは、来年度、旧西戸山二中跡地に新たに1所設置する予定になっています。

放課後子どもひろばは、土曜日と日曜日がお休み、平日のみです。時間は放課後から最大午後6時までということで、終わりの時間については各校のひろば連絡会で、地域の実情にあわせて決めています。また季節によって異なっていて、例えば夏ですと午後6時までですが、冬場は午後5時までとか、そういう格好で決めています。こちらは平成19年度から始まった新しい事業ですが、順次開設しまして、昨年度で全29校の開設ができました。

続きまして、2枚目、それぞれ3つの居場所でどんなことに気をつけてやっているのかということ、職員配置等です。

まず指導上の留意点ですが、児童館、学童クラブについては、それぞれ指導要領に基づいて行っています。児童館では、心身の健康増進を図る、知的好奇心を高める、社会的な適応力を高める、情操を豊かにすることを目指すことに留意して指導を行っています。

学童クラブについては、継続的に適切な保護に欠けるお子さんを、保護者にかかわって組織的・継続的に保護し、あわせて健全育成を行うということで、温かい環境づくり、一人ひとりの子どもの理解の上に立った個別的・集団的指導、社会的適応性を高めるための援助、自主的活動と生活圏の拡大等々に留意して行っています。

放課後子どもひろばの場合は、かなりきめ細かい対応をしている学童クラブと比べまして、自主的な遊びの支援、自主的な学びの支援という、自主性を重んじた、見守りを中心とした指導となっています。

職員配置についてです。児童館、学童クラブは、それぞれ児童福祉施設の設備及び運営に関する基準によって資格要件が厳格に定められています。保育士、社会福祉士等の資格を持った職員を配置することになっています。一方、放課後子どもひろばは、特にそうした法律上の要件がなく、区のとらえで管理責任者1名、支援者4名ですけれども、4名のうち1名はそうした資格を有する方が望ましいと定めているところで、おおむね国の考え方も地域のボランティアの方を中心としたイメージを持っています。

指導目標についてです。例示ですが、児童館は、子ども総合センターのものを少し引用し

ていますが、幅広い年齢層を対象としているということで、乳幼児については、心地よい居場所となるように、また子育ての悩み等、相談、発達との連携を図りながら、早期発見・早期解決につなげていくこと。幼児サークル等を通じまして、仲間づくりの支援も行い、孤立化を防止していく。お子さんたちにつきましては、気持ちよく遊べる場としていく。また、児童文化の創造ということで、遊び文化の継承、子どもの参画によって進めていく児童館文化の創造ということも意識しています。

学童クラブについても、子ども総合センターのものを引用していますが、思いやりの心、強い心を育てていきたい。家庭にかわる場として、心身ともに安らげる楽しい雰囲気が必要であると。基本的な生活習慣、生活力も身につける支援を行っていくということで考えています。

続きまして、資料3、利用状況の表をご覧ください。

23年度の児童館・児童コーナーの利用登録数、利用延べ人数、23年度の学童クラブ利用登録数です。児童館20館につきましては、すべて学童クラブを併置していきまして、その順番で下の学童クラブの名前が出ております。それ以外に学校内学童クラブが6つあります。

特徴ですが、新宿の場合、児童館は基本的には定員150人未満の小型児童館で、すべて学童が併設されているのが特徴になっています。定員の少ないところだと、3番の東五軒町は70人、多いところでも16番の西落合が165人ということで、小型児童館が中心になっています。

利用者数は、総計が53万1,000人余りに対して、小学生が31万人。1日平均で、児童館全体が74人、小学生が43人ということで、小学生が多くなっています。そのうち学童クラブが下の表にありますが、16万5,780余名ということで、これは児童館の小学生の利用の53%で、小学校1年生から3年生の利用になりますと72%。新宿の児童館の場合、学童クラブの利用が非常に多くなっている、学童の利用が中心になっているという特徴があります。

続いて、下の学童クラブの表です。定員と登録人数の計があります。総定員数は1,200人で、総登録数1,116人ということで、総定員の中でおさまっていますが、定員を超えている館が10館ございます。新宿の場合は、公立の学童クラブについては、待機児童を出していません。定員オーバーでも受け入れているという状況があります。

登録数ですが、1,116人というのは、この年度の5月1日の区立小学校の児童数、1年生から3年生までの29%に当たります。おおむね30%程度のお子さんが学童クラブを利用しているというのがここ数年の傾向です。

民間学童クラブも記載していますが、右端の欄外を見ていただくと待機児童が8名、1名

ということです。ちなみに、一番多いせいが学童クラブの待機児童のお子さんは、すぐ近くの落四小の放課後子どもひろばを利用していると聞いています。先ほど申し上げたように、こちらの民間学童クラブは午後7時までやっていますが、放課後子どもひろばは、落四小の場合は普段が午後5時半まで、冬場は午後5時までということで、学童クラブに比べると短い利用時間になっています。

続いて2枚目。放課後子どもひろばの利用状況です。こちらは上の段が29の全小学校の放課後子どもひろば、下の段に学童クラブが併設されているところの学校内学童クラブのことを記載しています。特徴としては、左から3番目、自校登録というところで5,363人、その1つあいた隣が他校登録202名ということで、ほとんどのお子さんが自分の学校のところに登録している。自校登録率が67.4%ということで、7割近いお子さんが放課後子どもひろばに登録していることで、登録率は高くなっています。

一番右端のところに1日平均利用率となっていますが、11%ということで、毎日1割以上のお子さんがひろばを利用している状況が見てとれます。

あと、自校登録率、利用率についても90%を超えているところが2校ある一方で、50%台の学校が6校ほどとか、利用率の高いところ、低いところのアンバランスはあります。

続いて資料2、運営資料です。新宿区内全部を載せると非常に膨大になってしまうので、地区全体を見たりとか、また児童館でいえば直営、委託、ひろばでいえば利用率の高いところ、低いところをいくつかピックアップして整理しました。

まず、児童館指導計画・総括表のうち、中町児童館です。こちらが平均的な新宿の小型の直営児童館です。現状分析です。今年度は学童クラブの利用が増えたので、定員オーバーを出しませんので、図書室を学童クラブ室に変更したりして、定員オーバーを受け入れることを行っています。一般児童の利用できる施設がさらに狭くなっても工夫しながらやっています。遊戯室の動的遊び等は時間を決めて交代制で遊んだりしています。行事についても教室が狭いので、学年別の入れかわりなど工夫して行っています。

2つ目が幼児サークルです。0歳、1歳、2・3歳児の3クラスでやっているのは結構平均的なやり方です。季節ごとの行事を取り入れたり、リトミックほかの専門講師の指導を取り入れたりしています。また、地域の保護者が主体的に行う自主サークル、こちらは10年ほど続いている読み聞かせの会があるんですが、そうしたボランティアの方に来ていただいてやったりもしています。

中町児童館の年間指導計画ですが、児童館の場合、大体日常活動、こちらは定期的に行っ

ている月例行事です。この館の場合は、ドッジボールだとか一輪車、クラフト中町というのは工作、あそぼう会、集団遊びの会などを定期的にやっています。あと季節行事を行って、子ども会議をやったり、夏まつりがあったり、映画会があったりと。子育て支援ということで幼児サークルがあって、中高生対応、地域活動。地域活動の自主事業と書いてあるのは、こちらは全児童館でやっていますが、土曜日、日曜日に地域の方の組織、自主事業運営委員会で、年間15万円ほどの予算で、年何回か行事を行っています。くれよんくらぶというのは先ほど申し上げた地域のボランティアのサークルのことです。

次に、子ども総合センターです。現状分析を見ますと、みんなで遊ぶ効果によって学校の壁がなくなっている。幾つかの学校の子が来ますが、そうした学校の壁がなくなるようなことがあります。あと一番下に出ている困った子ども。対応が難しいということで、児童館については、例えば中学生利用がそれほど多くないのですが、学校等に行く気がないようなお子さんが遊びに来てくれて、遊びのリーダーや実行委員をやってもらったりとか、育ち直しの場所のような機能も果たしています。

年間指導計画表の中高生のところに、試験直前勉強会があります。地域柄、外国にルーツを持つお子さんも比較的多く、こうした要望もあって学習支援などをやったりもしています。

地域活動連絡会というのは、こちらのセンターの特徴ですが、地域でさまざまな子育て支援団体とか、子育て支援に興味のある個人の方に集まっていただいて、地域の子どもたちに様々な事業を行っていただいているということで、タグラグビーだとかSけんクラブだとか、そうしたことも始まっています。

次に、高田馬場第一児童館です。学校内の旧幼稚園舎を使っており、児童館、学童クラブ、放課後子どもひろばを1つの指定管理業者をお願いしている特徴があります。

現状分析の3つ目のところに書いてある、学童クラブと放課後子どもひろばが共存することで子どもの把握が問題視されていたというのは、校庭でひろばの子ども、学童クラブの子どもが遊んでいます、当初はどの子かわからないということがあったのですが、今はひろばの子は黄色、学童クラブの子は緑と、リストバンドの色分けで区別するような工夫をしています。

中落合児童コーナーです。こちらは真ん中の運営及び指導目標の一番下に25年度へのスムーズな運営の引き継ぎを行うとなっています。来年度の学童クラブの委託に向けた準備も行っていくことになっています。

以上が児童館で、次は学童クラブ、11ページです。こちらは中町学童クラブ、家庭にかわ

る放課後の居場所となるということで、1番目は気持ちよく過ごしてもらいたい。2番目、遊びの中で自分を育てよう。3番目、自立に向けて自分のことは自分でしよう。おおむねこんなところでやっています。行事については右側の実施予定・計画等についてはお誕生会を毎月やったりとか、おやつづくりがあったり、お楽しみ会、お別れ会、あと児童コーナーの行事参加や個人面談なんかも行われています。おおむね同じようなことを他のクラブもやっています。

次頁に中落合学童クラブ、北一学童クラブがあります。中落合学童クラブの右上を見ていただくと、グループ活動、これもどこの学童クラブもやっていますが、異年齢集団で1年生から3年生までグループ別に、例えばおやつのおやつをつくりたりとか、そういうことでやっています。

北一学童クラブです。けがのこと、非常災害の対応のこと等についてはそれぞれやり方を決めて対応しているということです。あと、児童館行事の参加について、学童クラブでも積極的に声かけをしています。次頁が、四谷第六小学校です。

次頁から放課後子どもひろばになります。先ほど申し上げた各校の連絡会は、学期ごとに行っていて、こちらは24年度第1回連絡会の資料から抜粋したものです。愛日小学校、余丁町小学校が出ています。活動状況の概況です。カードが2種類あって、直接参加する場合の「参加カード」と、帰宅後参加は「きましたカード」、これもカードの種類を分けて受け付けをするようになっています。

愛日小学校放課後子どもひろばの活動状況です。(2)主に校庭での遊びが中心である。(3)大半の児童は遊びの前に宿題をして、校庭に出てサッカーなどで元気に遊んでいる。この学校の場合は学びの部屋が和室になっているのですが、部屋の中の活動は野球盤、レゴブロック、折り紙等が主流です。(5)雨天の場合は体育館を利用します。これが大体おおむね平均的な活動の状況です。

余丁町小学校放課後子どもひろばです。将棋・囲碁のボランティアさんが来たり、あと四谷第六小学校は③のところでイベントでいろいろ工作とかあります。月1回イベントを取り入れているひろばもあります。

次に、落合第四小の子どもひろば。下の課題・改善点などの3つ目でボールの紛失が大変多いとありますが、広い校庭でいろんなボールを使って遊んでいます。ボールがなくなることはいろんなひろばであります。

続いて、淀四小学校の子どもひろばの活動状況。②の3番目、読み聞かせを毎月行ってい

る、こうした読み聞かせを行っているひろばも幾つかあります。

以上が運営計画と指導内容との例示を挙げさせていただきました。

参考資料として、資料4でマップがあります。黒丸が直営の児童館、子ども家庭支援センター、赤丸が指定管理の児童館、青丸が学校内学童クラブ、黄色の丸が民間の学童クラブ、四角が小学校で、この全校で放課後子どもひろばが行われているという状況です。

最後に、参考としてお配りした「ほうかご子どもひろばアンケート」です。昨年度で全校開設したということで、これまで個別のアンケートをしたことがなかったので、今年度初めて9月にこれを実施する予定です。お子さん向けのアンケート、裏面が保護者向けのアンケート。参加したことがあるか、好きな遊びは何か、お友達がふえたのか、放課後はどこで過ごしているか等々を伺います。

あと2枚目が学校長向けのアンケートです。学校にひろばができて子どもにどんな変化があったのか、地域の方や保護者にどのような変化があったのかをお聞きします。

3枚目は自己評価ということですが、ひろばのスタッフにスタッフとしてどう見ているかのアンケートです。10月に集計し、11月に大体第2回目の各ひろばの連絡会で情報提供して、運営に反映させていきたいと考えてございます。

説明は以上です。

○福富部会長

ありがとうございました。新宿区の子どもたちに対する行政的なかわりという形で、具体的に児童館、学童クラブ、放課後子どもひろばという3つを取り上げて、それがどのように具体的にそれぞれのところで展開されていくのかをざっと見た、あるいはそれを知るための資料であります。

この部会の使命は、特に今年度は昨年度の部会や協議会で若者に対する実際の支援という形で行ってきたわけですが、残された課題として、実際に例えば家に閉じこもっている若者、あるいは仕事を持ち得ない若者に対する支援ということで、実際にそのような状況になる以前の予防的な措置が非常に必要ではなかろうかということ、最後の提言のところでもまとめさせていただいて、それを受けての話が今回の部会です。

そして、そういう形、問題が起こるような子どもたち、若者にならないように、子どもの状況の中で実際に居場所機能というものを十分機能することが、一つの予防的な措置になるのではないだろうか。じゃ、子どもたちがどのような居場所で活動しているのか。

今までのところで全体的に何か感想はありませんか。今年はこの中で全体を全部やるとい

うのは非常に難しいし、焦点化したほうが少しいのかなという気もしているんですが、全体で何かございませんか。

児童館の活動、学童クラブの活動、そして放課後子どもひろばについての説明があったわけですが、その3つの説明を受けた上で何かございませんか。

○委員

先ほどの御説明を受けて、それぞれの機能の共通性ということでは、いわゆる遊びを通して子どもの生きる力、言葉をかえれば、社会的な適応能力をいかに高めるかということにつながってくると思うのですが、特に異年齢集団というのは社会に出ると、企業でも学校でもいかなる集団においても異年齢というのは必ずそういう状況になってきますが、異年齢集団の集団遊びというのは、私は、遊びの中でも最も重視せねばならないと思います。ただ、昨今の状況を見るとひとり遊びが非常に主流化していて、それはデジタル社会の一つの動きだとは思いますが、アナログ時代の伝承遊びの様相、いわゆる缶けりとかかくれんぼであるとか、そういう伝承的な遊びの中で異年齢集団の様相をかなり多く持っていたほうが良いと思います。

特に異世代との交流としてもそこには必要になってくると思います。指導員に加えて、例えば高齢者のシルバー活用という視点も入れまして、各地域においてそういったボランティアで子どもたちと接したいという方も多いと思いますから、そういう多世代、あるいは多文化、新宿は多文化のコミュニティですから、私が住んでいる大久保地区はまさに多国籍のコミュニティなのですが、各地域の特色を十分に踏まえて、多世代・文化、そういった視点を十分に取り入れることが新宿区における子どもの生きる力のコミュニティの形成として私があってしかるべき姿かなと思います。

ただ、いかんせんひとり遊びが主流となってきますので、児童館とか学童クラブとかに登録していない子どもたちについてアンケート調査でその実態が浮き彫りにされると思いますが、なぜ登録しないのか、その辺の要因ですよね。ひとり遊びがよくてほかの知らない人たちと交流するのが苦手とする子どももいれば、そういう考え方を持つ御父兄も多かろうと思うんですね。うちの子は地元で私が育てるといって、いわば親子の孤立化ということもここには挙がっていますが、そういった観点も含めまして、障害を持ったお子さんも含めて、今回あくまで予防的な視点からということですが、最近では発達障害の子が1クラスに1名ぐらいいるというデータもありますから、そういった障害を持つお子さん、支援を必要とするお子さんをいかに取り入れて児童館等に引き込んでいくかが必要になるかと思います。

○福富部会長

異年齢・異世代という子どもたちのかかわりをこういう場の中でどう展開していき、どのような援助ができるだろうかということ。それからもう一つは障害を持った子どもたちのかかわりも含めて、異年齢、異世代、あるいは多様な人々とかかわりという形をこういったところで機能化していくことが意義があるのではないかということによろしいですか。

○委員

はい。

○福富部会長

承りました。ありがとうございました。児童館と学童というのは、それに対する具体の法律があって、それに基づいてきちんと展開されているという状況は、先ほどの説明の中にありました。ただ、放課後子どもひろばに関しては、そういう大きな枠がなくて、学校との関係もあるでしょうけれども、むしろ各地域の中で自主的に運営できる、そういった状況で、これは皆さんの御賛同を得ればということですが、その場で具体的にほかでいろいろ議論する余地があり得るとすれば、ここでもアンケートを実施するようですが、放課後子どもひろばにつきましてはまだまだ検討する余地が残っているのかなという気もしないでもないです。このところで少し議論を進めていくのも一つの方法かとは思っていますが、いやそうじゃない、こちらも大事だという御意見があれば、それに従いますが。

○委員

資料1を読ませていただいたときに、放課後子どもひろばの指導目標のところは斜線になっていたんですね。斜線になっているのはなぜかということで、これは何か指導目標がないのはなぜかという疑問点を最初出しまして、指導上、あるいは基本的な留意点がないためなんだろうなど。

そういう問題提起の中から、資料2を私がざっと目を通して一番感心したのは、落合第四小学校の子どもひろばでした。

○福富部会長

何ページですか。

○委員

15ページです。結局一番大事なのは書く方が、例えばその他の欄が非常に明瞭的確というんでしょうか、落合第四小学校のを書かれた方はその辺割と細かく出されていて、こういう要素が上級学年につながっていく気配を感じる。恐らくこの辺の対応が問題となるのかな。

やはり放課後子どもひろばというのは一つのポイントにもなるような要素が大きいのかな。

○福富部会長

要するに放課後子どもひろばを検討することによって、まだまだ改善する余地というのがあり得るのではなかろうかということ。もちろん、学童クラブや児童館も完全にパーフェクトというわけではないと思うし、それはそれぞれのまだまだ検討課題はあると思いますが、それもあわせながら検討していく。一つの視点は放課後子どもひろばということにある焦点化をするということはどうでしょうか。

○委員

ひろばとおっしゃったのは確かにそうだと思いますし、実際に各館で行うようになったのはつい最近ですから、各館によってどこまで遊んでいる状態に応援したり、例えばしかったりすることをしていいのかというところが今試行錯誤で、余り手を出しちゃいけないと言われているんだというような感じなんかも見受けられるし、そこらが一つまだまだ曖昧な、任されている分、曖昧になっているところがあると感じています。それは保護者からも聞いています。もちろん、安心な遊び場としては非常に大事だし、学童を巣立った後も行ける場所として一つ大きな場所があるということは、学童の保護者も非常に評価をしています。

同時に、同じような居場所として児童館があるわけです。ですから逆に言うと、ひろばを少しこれはどういうふうに今後発展させていくのというのと同時に、ひろばは例えば役割の違いもある程度はつきりさせながら一緒にやれることは何かというのでも検討していただいたほうがいいのではないかという気がしています。

○福富部会長

先ほど、ひろばについて思っていることを言ったもう一つの背景は、誤解というか、ひろばの活動というのは一体どういうことなのかについて、まだまだ行政の情報が不十分なところがある。というのは、ひろばにかかわる大人たちに対して何もやってないじゃないか、もっと指導せいというような住民からの声も上がっているということなんです。ところが、実際はそうではなくて、要するに安全を見守ることが視点であって、そこで遊びを実際に指導するとか何かするという事ではないです。それはむしろ児童館のほうでありまして、児童館は、ある計画の中に具体的にいろんな行事云々で活動を指導していく。したがって、そこにかかわるにも資格が要る。

ところが、ひろばというのは子どもたちの自主的な遊びというものを、安全というものを重視してどう遊びを安全に展開できるかという見守りであり、そこでは指導ということにな

っちゃうと、児童館とむしろどう違うのかということにもなる。そのあたりについてまだまだひろばについてはそれがどういう機能でどういう意味があるのか、果たしてそういうものがどれほどの意味があるのかということも含めて、議論の余地はあるのかなということだったんです。

実際に私も伺ったことがあるのですが、周りからただぼーっと見ているだけじゃないか、それはけしからんと。じゃ、けしからんのかどうかということも実は議論の余地があるところなんですね。果たして子どもひろばというのは一体何を指してどうなのかということは検討しなきゃいけないと思います。

○委員

私が子育てしたときは学校の校庭はだれでも使っていていい、登録してあるから使っていていいか、そういうことではないんですよ。ここは登録しないと使えないということは、ある程度限度があるので、例えばきょうはこの学校に行きたいし、あの学校を見てないから、あしたはあっちで遊びたいなという子もいると思うんですね。そのときに何か登録していないと入れないというのは、管理ですよ。もちろん保険とかそういう問題があるから、必要なかもしれないですけども、やっぱりフリーで利用できるというのも学校の開放された役割だと私は感じたんですが、そういう不満は余り出ないんでしょうか。

○福富部会長

そもそもひろばというのは、原点は学校開放だったんです。ところがその後いろいろ、要するに学校というのは安全な場であったはずなんです。思い出すのも嫌なことです。ちょうど私が学芸大学の教授で、校長を併任させられた年になりますが、池田小学校の事件が起こりまして、あれは今までの学校に対する考え方を本当に180度がらっと変えてしまった出来事でした。要するに学校というのはそもそも安全な場なんだということを私は信じて疑わなかった。それがあの事件が起こって、全くよその方が学校に侵入し、あれだけの事故を起こしてしまった。学校はどうぞオープンオープンということを言えなくなった。

しかも学校開放というのは解き放つ解放と開く開放という2つの理念があったんです。どちらが学校開放の理念に合うのかという議論があそこは非常に起こっていました。学校というのは地域住民に開放すべきだ。

それから、私は杉並第十小学校の学校開放に関わってしまっていて、あれも地域に開く学校の機能だ、使命だということでやってきましたが、がらがらになってしまった。開放できなくなってしまった。要するにだれかが、大人がきちんと見守っていないと危ないよということ

になった。理想はおっしゃるように、きょうはこっちの学校に行ってみよう、きょうはこっちということができれば本当はいいのかもしれませんが、それが今の状況だと私は思います。そこも議論に含めていくべきだと思いますけれども。よくわかります。

○委員

小学校の範囲でいうと、やっぱり自分のところの子どもたち、同じ小学校の子どもたちと遊ぶ機会が多いから、それがほかの学校に行くというのは余り私はないと思いますね。

○委員

私は、学童保育が1つの学校に入っていて、それが複数の受け入れ学童保育だったんですね、うちの子どもは。そうすると2校があったので、一つそこのA校にいる人もB校へ行ってみようみたいな形で結構行き来があった。

○委員

ああ、学童クラブは確かにありますね。

○委員

ですので、学童を経験した子は、その学校も見てみたいとか、そういうのがあるので、その学校だけじゃなくて、ほかのも見たい子はいるんじゃないか。絶対見たくないというのではないと感じました。

○福富部会長

そういうことというのはあり得るんです。例えば私は附属の校長のときに、ふだん君たちは学校という、要するに住んでいるところと違ったところに来ている。だから、夏休みとかいろんなときにおいては地域の子どもたちと遊びなさい。地域とかかわることが君たちにとって大事なことなんだという指導をかつてはしていました。ところが、どこでどう関わるかということになるとなかなかできない。当時一つの関わる場は学校で、開かれているなら学校に遊びに行くということもあり得るんだよと。それは私立の学校に通っている子どもたちもそうだと思います。だから、子どもたちは、住んでいる地域が、必ずしもそこだけがすべて学校ではなくなってきた状況だというのがとにかくあるわけですから、それも地域の子どもたち。だから、そういう子どもたちに対して居場所、遊び場としての学校というのはあるべき。ところが、その登録となると確かに厄介ですね。

○委員

登録は他校の人でもできます。

○福富部会長

できるんですね。

○委員

私も近くの小学校で夏休みとかプールのお手伝いとかをしているんですが、私立のお子さんも登録できて、遊びに来られるので、それは結構自由に選べます。

○委員

複数できるんですか。

○委員

複数できます。

○委員

今は自由選択制で、結構遠くの学校へ行ったりするので。

○委員

越えて行きますからね。

○委員

ええ。近くの学校があいていればそこに行けるシステムになっています。

○福富部会長

登録をやめると難しいでしょうね。

○委員

そうですね。登録はしたほうがいいと思います。

○委員

登録の期間は在学期間中は有効なんですか。

○事務局

保険料の関係があります。保険が1年更新なので、毎年登録していただくことになります。ちなみに、幾つの学校に登録していただいても構いませんが、その年度、1つ登録すれば200円の保険料で幾つの学校に登録することもできます。先ほど座長からお話があったんですが、だれが来てだれが帰ったとか、そこら辺は管理責任者が把握しておく必要があるので、やはり登録はしていただくということで考えています。

○福富部会長

本当は登録なんかなくて、子どもたちが自由に行きたいところに行って遊んでという社会ができれば一番ベターだとは思いますが、どうもこの御時世でそうも言ってもらえなくなりました。

○委員

保護者自体も、ここの児童館に放課後あなたは行っているのねということで仕事を安心してできていることもあると思います。

あと、放課後子どもひろばというのは、そのまま学校の放課後をひろばとして利用しているので、学校が終わった後に児童館まで歩いていくというよりは、そのまま引き続いて、学校の中にいたほうが安全が確保されるわという保護者の考え方。逆に低学年なんかは親の希望でどこに行くか登録をすることも決められている子が多いんじゃないかなと思います。

逆に働いていない家庭は、今日は友達があっちの学童にいる子と遊ぶからあっちに行ってくるねとか、今日はひろばのお友達と遊びに行ってくるねという感じで、逆にそういう子たちがそういう形でいろいろ選択しながら遊んでいたりしているようです。

○福富部会長

今の話の流れというのは、子どもの安全を確保するために大人、あるいは行政、あるいは組織がどのように安全を確保できるかという観点の話。もう一つは、今度子どもの視点に立ったときに、子どもは何をそこで求めて、そこにすることによって何が得られるのかという視点ももう一つ考えなきゃいけないのかなと。それが一つさっき委員から出た、異年齢とか異世代、あるいは異人種と言っていいのか。いろんな人か。

○委員

多文化とか。

○福富部会長

多文化。

○委員

多文化共生。

○福富部会長

異文化との交流か。異文化、異世代、異年齢、要するにいろんな多様な人々とかかかわるといことがなぜいいのですか。

○委員

なぜいいかというと、社会そのものが、ちょっとグローバルな言い方をすれば人類の共生、共生というのはある種人類の共通・恒久的なテーマになっていますから、そういう意味では日本社会も今、外国の方々が多数流入してきているので、グローバルっていろんな移民の移動とか、そういった流れで日本もその対象になっています。これからの次世代というのはそ

うという視点で育てることが必須の条件だと思います。

それは企業に入っても、例えばユニクロでも外資系企業でも結構留学生がたくさん入っていますよね。ですから、共生というのはどこの集団においても一つのテーマとして共通性があると思います。遊びの中にもそういう視点で。

○福富部会長

ただ、あえて言いますと、確かに異文化とかいろんなかかわりはプラスだと思いますが、もう一方気をつけなきゃならないことが、異文化は、本当にそこに階層性がないだろうかという問題もありますよね。わかるでしょうか。だから、我々にとっていろいろな文化を知ることの文化というものが、ある一つのイメージがないだろうか。要するに西欧的な文化とのかかわりは大事にするけれども、それ以外の文化をないがしろにするということであると、逆に問題が起こる。そのときのかかわり方を異文化という状況の中でどのように保証していけるのかという視点も入れなきゃいけないと思います。

特に開発の問題とか考えていったときに、まだまだ異国との関係、あるいは植民地とかの問題もある。そういう状況の中でそれをどう子どもたちに伝えられるのかということです。

○委員

今の異年齢ということですが、学童クラブは1年生から3年生、もしくは障害があつたりする方は6年生までということですので、そもそも生活というか、居場所自体が異年齢が共生をする場なんです。

さっき説明にあったように、児童館で学童クラブがあるところというのは、児童館自体は学童クラブの子たちがいつも遊んでいる場なので、ある意味ずっと異年齢で遊ぶということ。例えば中学生の子たちでも、なかなか中学校ではうまくいかなくて、児童館に来て下の子たちの面倒を見ることで自分を保っている子がいるんですね、毎年のように。そういう子たちと遊ぶことも非常に自然にできるような環境があるんです。

だけど、実際にひろばというのはなかなかそういなくて、例えばうちの娘が4年生になったときにどうしたかという、1年生とか2年生とか3年生の子たちを集めて一緒に集団遊びを始めたんですね。そうするとやっぱり楽しいから、寄ってきて集団ができていたんだけれども、それが例えば卒業して中学に行ったらその集団が続かなくて、結局ひろばに行かなくなっちゃったんですよという話を伺う。それは働いていない主婦のお母さん何人かからそういうことを聞かされて、私は娘がそんなことをしているのを全然知らなかったのですが、それを指導者みたいに本当は伝えていくことまでは小学生ですからできませんが、一緒に遊

ぶことは割と自然にできてきた。

だから、本当は異年齢がいるということだけでは、異年齢の遊びにはならないんです。そこらが難しいところで、じゃひろばにそれを求めるかという、これはなかなかちょっと、じゃどれだけかければできるのというのも難しいし、人材も育てなきゃいけないし、難しいところなので、今のところは安全な広い公園だというぐらいのところかなという気がしています。

○委員

詳しい定義は難しいと思いますが、要するに遊びを中心とした子どもの生きる力ということでは共通していると思います。年齢の中でも最近では自然体験要素というのがないので、命の大切さを同時に学び取っていけるような遊びの要素が必要になってくると思います。

命の尊さというのは、昔の話になっちゃいますけれども、私たちのころは結局自然を通して動物の死とか、昆虫の死とか、そういったものを通して、死ぬというのはどういうことか。死が身近でなくなってきたる現在は命の尊さがわからないものですから。そこにきてバーチャルというデジタルの問題が生じまして、ちょっと話が脱線しちゃっているかもしれませんが、それで最近のいじめというものは犯罪化しているわけです。これだけ毎日連日報道されているということは。

遊びの要素としては、一人遊びが主流化している。デジタルのそういう弊害が結構遊びにもたらしている影響が大きいと思うのですが、集団遊びというのは先ほどの異年齢ということと、それからやはり高齢化ということを考えて、そこにシルバー人材をいかに含ませて、専門的な指導員を中心として、なおかつそこにシルバー人材のおじいちゃん、おばあちゃん世代の孫を見るような、優しい視点で見守るような、そういう安全管理の中で子どもをいかに伸び伸び育てるか。そこに命の尊さ、生きることの喜びみたいなものを遊びを通していかに伝えていくか。それは伝承遊びというのがかなり大きいかなと思います。

要するに、高学年の子というのは低学年の子に対して、少なくとも私たちの世代というのはみそっかすみたいな、今ではもう死語になっていますが、いたわりとか思いやりの心というのは、遊びを通して高学年の子は持っていたんですよね。それはある種私も経験しましたが、自然発生的に幼い子どもたち、幼い低学年をいたわりたいというのが自発的に出てくるんですね、子ども心として。

ですから、異年齢集団の集団遊び、そこにリーダーとなる高学年の子をそれぞれ決めて、それでリーダーを中心に低学年の子の面倒を見させたりとか、そういう必要があるし、それ

全体を見守るのが専門の指導員と、おじいちゃんでありおばあちゃんであるというような、私の中ではそういう遊び全体の構図が一応あるのですが。だから、そういう方向に持っていくのは何か遊びを通した生きる力への結びつきになってくるのかなど。

○福富部会長

いや、すごくその問題、基本的に同感なんですけれども、じゃもっと開き直ったときに子どもにとって遊びってなぜ必要なのか。遊びを通して子どもたちがよく遊びから学べるんだとか、いろいろ言うんです。でも、その遊びって何なのでしょう。

○委員

居場所というのがキーワードになると思うんですが、居場所がつかれるというのは一体何をもって居場所というのか。遊べていけばいいのか、その場所にいければいいのか、親が安心してそこにいるということが把握できていけば居場所なのかといろいろあると思いますが、今後アンケートなどを実施する場合に、優しい人が多いですかとか、楽しんで遊んでいますかというのにマルをしたら、それが居場所になっているというわけでもないで、今のいろいろな議論の中で、どういうふうにしたらそれが居場所と言えるのかどうかということも考えては。

○福富部会長

そうですね。だから子どもにとって居場所が必要だとか、その居場所の中で遊びが必要なんだ。さらに言うと、自然に触れることはいいことですよと。そういう状況がいろいろ出てきたときに、じゃ大人は、行政は何をするか。子どもにとって居心地のいい場所をつくりましょう、遊びもいろいろ指導員をつけて、あるいは遊びの場をつくりましょう。異年齢が大事ならば、そこにいろんな世代を用意しましょう。さあ、用意しましたよ。という状況が今までの行政のパターンだったと思うんです。すべてそういう必要、これも必要だ。その一個一個については何の異論もないことだし、大事だ。

結局、子どもたちにしてみれば全部そういうものが用意されちゃった。用意されたものというのは、本来言っていたものと実は同じなのかというと、まさにそれはつくられた仮想空間なんですね、自然発生的ではなく。そういう与えられたものの中でしか子どもたちは展開していかないと、そこでどんなにやってみたって、本当に子どもたちがそこで物を得ていくのかというところが今ちょっと違ってきちゃったんじゃないか。余りにもそういうので大事にして、これは必要だこれも必要だというので用意しました。異年齢が大事ならば、おじいちゃん、おばあちゃんを呼んできましょう。いろんな関わりもしましょう。いろんな学年と

の関わりもしましょう。リーダーを養成してリーダーで遊びましょう。子どもにすれば全部用意されちゃっているわけです。

さあ、これだけ用意したから君たちは立派な大人になれるかという、何かもう少し、もう一歩その場合に必要な視点がないのかなというのが実は前回の議論からの一つの延長だったと思います。そう受けとめています。

○委員

結局、行政は箱物ができちゃっているから、限られた空間、児童館という学童クラブという限定された空間の中で、そういう大人が用意したもので子どもの自発性が育つかというと、私は甚だ疑問なんですね。要するに昔と比較すると、自然そのものが空間だったわけですから、自然の中で子どもが自然発生的に遊びを通して学んで、そこでいろんなものを目にして、それで上下関係の中にも思いやりとか、そういったものが自然に芽生えた。でも今はみんなすべて用意してしまっている。

箱物というのは安全性を考えればいたしかたないとは思いますが。ですから、私もそこに自然の体験、私は自然にこだわるんですけども、先生は先ほど遊びとはなぜ必要かと。子どもの視点ということから考える場合、遊びというのは生きる力に最終的につながってくると思うんですね。なぜならば、集団遊びを通して人間関係ですよ、遊びというのは対面的なコミュニケーションですから。その中でいろんなもつれ、あつれき、そういったものが生じる。それに対して子どもは感情を抑制する。感情のコントロールを学んでいく。それから、今度は規律が生まれる。子ども同士のルールがそこに生まれてくる。そういった規律を学ぶ。

それからあとはストレスへの対処ということもあると思います。感情のコントロールも含めて。そういったものが社会的な適応力となってくると思います。そこには自分を表現する自己表出の主体性ということも遊びを通して形成されると思いますから、そういったものをトータルして社会的適応力、生きる力。要するに文科省が言う知徳体。

○福富部会長

それはわかるんですけども、大人にとって遊びは何かというと、仕事だって遊びじゃないかと思うんですね。だから遊びというのは一体何なのということ、すごく我々のイメージの中で遊びは大事だというふうにとらえ込んできているけれども、実際本当に子どもにとって大事な遊びというのは何だ。子どもの生活にとっては、ある意味では、子どもは生活が遊びそのものなんです。一人遊びがよくないと言うけれども、本当によくはないのと。それだって疑問だと思いますよ。集団遊びがすべてよくて、1人で遊ぶたって、それも子どもに

とって一つ遊びだ。

だから、大人が遊びについてある固定的なイメージをつくっているから、そこをもう少しがらぼんでできないだろうか。そういう中で、じゃ改めて居場所というのはなぜ必要なのかとか、子どもにとって今必要なのは何なのかということ。そのときに児童館や学童クラブは余りにも箱物がきちんとし過ぎているし、それを支える法律体系もきちんとしているけれども、放課後子どもひろばは多少そのところで自由度があるんじゃないかと僕は思います。

○委員

僕が言いたいのは、異年齢があって、そこでの子どもの育ちというのはどういうふうに評価するのか。それからひろばという雑然とした大きい公園、安全な、そういうところでの育ちというのは現状どうなのか。私はそういうことの比較がないと。

例えば、箱物は確かにそうですけども、自分も田舎育ちですけど、必ず自然の中に連れていってくれたというのは、自分より先輩の人たちが、例えば虫を中身を取って笛を吹いたら音が出るぞみたいなことを教えてもらったり、ここにはこんなおもしろい木があるから上ろうみたいなことを教えてくれたり、そういう経験をどんどん後ろに伝えていくことが、その関係があって、自然に育ったというよりはやっぱりリーダーがいて、公園とにかく無理やり集められて野球やるぞって。1年生のときから怖いからしょうがない、行くかみたいな感じで行ったこともあるし。結局は箱であろうが何だろうが、人間の環境の中で子どもの育ちはあったと私は思うんです。児童館が完成されているとしたら、どういう意味で児童館というのは子どもたちを育てているのか、もしくは育てきれていないのか、そういうことも含めて話し合っていた方がいい気がします。

異年齢というのはいろんな意味があって、単純にすぐ上の子が下の子を思いやるなんていうふうにはなくて、実際の場合では、例えばドッジボールとかでもボールを当てられた下の子は泣き出しますよね。そうしたらどうするのかという話になるわけです。下の子はおもしろくないから出ちゃう。そんなんでいいのかという話を、例えば指導員がして、みんなで話し合いしろとやるわけです。そうやってある程度のアドバイスをした上で、集団がだんだん自分たちのルールを持って遊び出してくることが多分起こってくるはずなんです。

そこにも何かそういうポイントというのがあるし、例えばけんかになったってけんかをいきなりとめるんじゃなくて、殴ったらお互いに痛いよということがわかる意味では、多少させたほうが私はいいと思うし、それがなければ、さっき仮想空間と言われましたけれども、

相手も痛いんだよということがわからないからそういうことが平気のできる人が育つことになるわけですね。ある程度ぶつかり合いがあるというのは、集団遊びの中でもまれるというのはそういうことも含んでいると思います。お互いに痛いんです。そういうことの中で子どもが何を身につけていくのか。

一緒に遊ぶためにはどんなルールをつくらないといけないかということ子ども同士で話し合いますよね。そういう過程を経ながら社会性をそこの中である程度身につけている子が育つ。もちろん全員が育つとは言えないし、たまには本当にかみつしまくる子が学童にいたりするので、私も父母会長ですと苦労した経験があるので。だけどトータルでは学童の子たちの、ぱっと何かやったときにぱっと集まるような社会性というのは私はあるような気がするんです。そういうのをどう育てるのか。少し評価をしながら育てるのかというのが何かあるような気がするんです。

○委員

ちょっと視点を変えて、わかる方に教えていただきたいのは、児童館によっては行事の中に遠足という項目があるところがあります。これは遠足だからもちろん日帰りで帰ってくるものであって、宿泊を伴わないというイメージにとらえられますが、その辺どういうふうになっているかお聞きしたいのは、私が文部省時代に野外活動指導者ということで、ユースホステルを使って泊まろうという、今ではなかなか取れないんですけれども、野外活動指導者1級指導者として、何日も泊まりがけでやっていたんですけども、そういうものが全然今の時代は利用価値が低い。使えないというんでしょうか。

○福富部会長

あることはあるんですよね。全国に幾つか青年何とかの家ってありますよね。

○委員

確かに登録証は野外活動指導者1級なんてちゃんといただいている割に、何のお呼びもわからないし、利用価値もないということなので、児童館の運営の中にはそういう宿泊を伴って。私の場合はユースホステルを使って何泊か泊まりがけで、例えば同学年、例えば異年齢の方たちと一緒に行ってというようなことでやった時代がすごく懐かしいといいたいでしょうか。今から見たら、やはりそういうのは人員の問題もあるだろうし、ちゃんとしたホテルに泊まるのがいいんだよなんて言われると。遠足の実態というのは近場に行く遠足のようなものなんでしょうか。近場と言ったら変ですけども。

○委員

児童館で行われている遠足というのは、宿泊を伴うものは基本的にはありません。開館時間が6時までということもありますけれども。ただ、ほかの児童館、学童クラブ、放課後子どもひろばではないですが、他の子育て支援施策の中で育成会での活動であるとか、生涯学習の活動であるとかの中ではそうしたものをやっているところもございますし、あとまた最近それほど多くないかもしれませんが、学童クラブの父母会でキャンプをやるとか、そういうことを行っているクラブはまだあるのかなと推測はしています。

○委員

わかりました。

○福富部会長

学童の保護者会というか、父母会主催ですよ。

○委員

要するにキャンプ。

○委員

そうですね。私も随分あちこちに行きました。

○福富部会長

1泊か2泊。

○委員

はい。ただ、非常に難しいのは、男の人はいいんですけど、女性というのは自然のところに行くとか虫がいるだのなんだのといって騒ぐ人たちがばかりで、キャンプにならないんです。非常にそれが何というか。子どもたちはまあまあキャーキャー言いながらなんですけど、こんなところには来れないという感じが強くて、なかなか難しいですね。私たちなんかは本当にバンガローの小汚い、一部かびたようなところに寝るのがキャンプだぐらいにしか思っていなかったのですが、実際に自分がキャンプとやってみるようになると、ああ、これはやっぱりそこそこきれいなバンガローぐらいしかないかなというので、例えば山中湖の周辺のある程度整った、キャンプじゃないかなんて。

最後は箱根の別荘みたいな、芦ノ湖キャンプ村という本当に貸し別荘みたいな。それは評判がよくて、女性たちに迎合したんですけれども。でもみんなで行って、OBたちも来ますから、OBたちに例えばあちこちの、そんなに暗くないのであちこちに立って、子どもたちにお化け屋敷じゃないけれども、オリエンテーリングじゃないけれども、ここに行っただけをもらって、次に行っただけ帰ってこいと。その途中で白い服を着て驚かせみたいなことを、例

えばそういうOBの子たちが来たらやらせたり、そういうのはOBの子たちは学童にもなれているので、ずっとやってくれるので、そういうような経験はしてきました。今は本当に残念ながら父母会がある学童には行きたくないといって、親がひろばに行かすというのが露骨に聞こえてくるので、きょうのテーマじゃないですが、1年生とかで親が働いているのにひろばに行っている子というのは、やっぱり実際はほったらかされているわけです。そういうのは本当は逆行なんだろうと気がするんですね。本来学童に行っている子がちゃんと行っているのか。金も6,000円かかるからというのがありますが、何かそういうのとかいろいろ感じるところがあります。

あとは1年生から卒館後のことを考えて、毎日けいこづけにしておいて、それで安心を買っているみたいな傾向もますます強まっています。だから、むしろ親の管理がそうやって一々言っていることのほうが、私は子どもの自主性を阻害しているような気がしてならないです。なかなかそれを面と向かっておかしいだろうと言うと、父母会も連携も壊れてしまうので、余り極端な例以外は言いませんが、でも物すごく気になっています。

○福富部会長

新宿区では、教育委員会ですか、学校絡みなのか。千代田湖というのがあるんです。そこに飯盒炊飯ができる施設を持っていますよね。

○事務局

ええ、テントを張って宿泊しています。

○福富部会長

あれは学校ですか。

○事務局

学校です。小学校ですね。

○委員

昔はそれと同時並行で、社会教育で高遠町の中にある城址公園の中でもキャンプをやっていましたね。

○事務局

千代田湖と町中と。

○福富部会長

すごくいい場所があるんです。附属でよく使わせてもらいました。

そこで、今日は、実は第1回でありながら1回ではなくて、もうそんなにないんですね。

ある程度焦点を絞っていただけるとありがたいなと思います。でも大分きょういろいろ出てきたなという気がするんですけどね。

○委員

さっきの自然の家というお話は、多分NPOか何かで交通公園とか箱根山公園を使って遊ぼうという会があったりとか、プレイパークがあったりとか、それはそれで別のボランティア団体さんがあるんですね。そういうことをもうちょっと保護者に言ったりとか、こういう活動をしてるよというのがあったりすると、またいいのかなど。地域の方もわかって、そういう子たちが遊んでいるんだったらボランティアでやりたいわという方もふえてくるかもしれないし。ただ、先ほどもおっしゃったみたいに、じゃ子どもだけ言ってらっしゃい、お母さんたちは別という保護者が本当に増えてきているので、なかなか運営している方たちは、働くスタッフを募集したりとかで今大変になってきています。

やはりそういうところに来るお子さんというのは、先ほど申し上げたみたいに、結局子どもを学校に預けました、放課後は学校にそのままいなさい。何しろおうちには御飯さえ食べに来て寝てくれればいい。あとは平日も土曜日、日曜日もどこかに行ってなさいという家庭が本当に増えていて、そういう家庭で育てているお子さんたちって、悲しいかな、一般常識やモラルや生活レベル、生活の常識というのが本当に欠落している。

先ほど中学校のほうで、中学校に居場所がない子が子ども総合センターに来ている、そこでリーダーシップを発揮しているということでお話があったのですが、多分うちの学校の子たちなんです、そういう子たちというのは結局小学校までだったらまだ本当にいい子たちだったし、学校の先生も1年生から6年生まで、お友達も周りの保護者も1年生から6年生までその子を見ていくから、気持ち的にフォローができた。だけど、中学校になるといろんなところから子どもたちが来るから、そうすると今まで見守ってくれた目というのが薄くなり、全然知らない保護者、あとは関わりがない大人たちというのが、今度違う視線でその子たちを見る。やっぱりいい子じゃないわと見られているのがわかってくるし、またそういう家庭の子たちはそういう家庭の子たちで、何か心寂しい子たちが集まってしまう。やはりそういう子たちは小学校では算数、国語、社会、理科があったとしても、体育とか音楽とか図工とか、逆に先生はそれを勉強とおっしゃるかもしれないけれども、子どもたちにとっては遊びみたいな授業だった。それが中学校になると体育は体育という授業、音楽は音楽で、本当に学ぶほうの音楽になっちゃったりして、授業中に座ってられない子が増えてくるんですね。なのでごめんなさい、何を言っているかまとまらないのですが、やはり家庭力。

○委員

ちょっといいですか。先ほど予防的な視点というか、要するに問題を起こす以前に、そうならないような予防的な意味での子どもの居場所づくりということで。ただ、予防的なということも重要ですが、現実問題はいじめと不登校と引きこもりという負の連鎖というのが、結構これは文科省でも調査は始めているようですが、いじめ、不登校、引きこもりの連鎖って私たちが考えている以上のものがありますね。文科省の一昨年調査でいじめの認知件数が7万5,000人というんですね。不登校の児童が小中学校が11万5,000人という統計が一昨年のデータであるんですが、それを考えると、いじめに遭って、不登校になって、引きこもりがちなお子さんとか、あるいは発達障害も今1クラスに1割ぐらいいるという産経新聞の記事も一昨年出ていたのを目にしまして、新型の学級崩壊が起きている現象があるらしいです。

ですから、いかに放課後クラブ、児童クラブとか、そういうお子さんの居場所をつくってあげるように持っていけないことには、国の政策の視点がそもそも子ども・子育てを社会で支えるというのが国の基本的な姿勢として、子ども・子育てビジョンがあるわけですから、そういう大きな構図の中で児童館の位置づけを考えるならば、やはり支援を必要とするお子さんを予防的な意味合いだけではなくて、そういうお子さんもひっくるめていかに取り込んでいくかですよね。児童館とか放課後クラブのほかのお子さんと一緒に、そういうお子さんをいかに引き込んで取り込んでいくか。そういう視点で持ってこないで、一方でそういうお子さんが脱落していくような、私はマイナス的な考えが出ちゃうんですが、社会全体で見えていかないといけない。そういうお子さんをいかに持っていくかということを考えると、その辺どうなのかなと。

ただ、利用状況を見るとデータとして資料3の2枚目には障害児の方。あとちょっと気になるので聞きたいんですが、資料3の1枚目の1番の児童館のところ、利用者数の内訳の中のその他というのは具体的にはどういう方を指しますか。

○事務局

保護者が中心です。乳幼児のお子さんは当然親御さんと、お母さんと一緒にいらっしゃいますので、お父さんも若干いますがお母さん方が中心になっています。

○福富部会長

そうですね。中学校、高校生、幼児にカウントされない、それを幼児を引率してきたというか、保護者が来ると保護者1とカウントする。それがその他になっています。

○委員

この保護者だけでなく、例えば親戚の方とか、そういう方も。

○事務局

そういう方もいらっしゃる。あとまたこれは統計上の課題ですが、例えばお祭りとか、なかなか学年とか区別ができないようなものはその他になっている部分もあります。

○委員

基本的なことで、先ほど居場所とは何かとか、遊びとは何かという、本当の子どもの心をまだ僕たちはわかっていなくて、ただ物をつくれれば、あるいは品物を置いておけば遊ぶんじゃないかと思うんだけど。前にこういうことがあったんです。うちの田舎に子どもたちを4人連れて行って、庭に遊ばせておいたら、トタンを拾ってきたり、木を拾ってきたり、段ボールを拾ったりして、素晴らしいうちができちゃったんです。これはなかなかと思って、今度次の時にそういう木とかちゃんとしたやつを置いておいたら、全然見向きもしないのね。だから、子どもたちって自分で見つけて自分で工夫するところにいいところがあって、例えばドアをつくっても、僕たちが見ると、ああこういうふうにしたほうがいいなと思うんだけど、全然違う発想で作っているんです。

また、例えば、部屋の中にその子たち4人置いてきたときに、座布団が10枚ぐらいあったんです。これでどうやって遊ぶのかなと思っていたら、その座布団に乗って、こんな高くなるんですね。それでおじぎすると倒れますよね。それがおもしろくて、それでもって3時間ぐらい遊んでいるんです。

だから、僕はセンターで子どもたちの、ひろばじゃないけれども託児所があったんです。そこにおもちゃを置いておいた。おもちゃで遊んでいるのはほんのわずかです。あちこち鬼ごっこしたりなんかして騒いでいる。自分の持ってきた、例えば車を置いておいても、車を置いておいても、車では遊ばなくて積み木でもって車のかわりにしているんです。これを見ていると、僕たちはもっと子どもの心を知る必要があるなと思いますね。だから、物をつければいいという発想は、大人の指導のもとに、大人が主催して子どもが遊んでいるということなんだけれども、子どもは全然違うんだと思います。

だから、やっているかもわかりませんが、実験です。このくらいの広い部屋に10人か20人ぐらい子どもを入れて、紙と鉛筆とかこういうものとか置いておいて、どんな遊びをするかを実験して見ているといいんです。そうすると子どもたちが何が必要なのか、何ができるのかということ、それから我々は、じゃ何もしないほうがいいんだなということに気がついたりすると思います。

それで、年代間もそうです。やはり同じ年代の人たちだと発想の転換が余りいかないんです。ちょっと上の人がいると、あるいは下の人がいたり、女の子がいたり男の子がいると遊び方がまた変わってくるんです。これは人の思いやりがあるわけですよ。今ずっと聞いていて、何かちょっと違うような感じがしたんですよ。

○福富部会長

私が申し上げたかったのがまさにその問題だったんです。

○委員

私は子どもにいろいろ関わってまして、育成委員会をやっていますし、あと民生・児童委員として関わったりとかも多いですし、あと10年前に文科省から依頼されて居場所事業を始めたんです。ひろばができる前まで。今も続いているのですが、子どもひろばができた時に、私たちの使命は終わったのかなと思って、やめようと思ったんですが、今もやっているのは、地区の4つの小学校全部から募集して、35人から40人なんです。1年生から6年生まで、毎週水曜日にもものづくり塾というのをやっています。募集すると100人ぐらい来るので、抽選になります。バランスよく入れてやっていますが、確かに物をつくるというので、きちんといろんなものを与えてやらせるんですが、子どもっていろんな発想を持っているなと考えさせられます。

あと居場所事業が、やっぱり優秀な子とかリーダーシップのある子も来ていたんですが、最近ちょっと傾向が変わりました。要するにクラスの有名人という子が来るようになりました。必ず何人かそういう子が入って、クラスではちょっと変わった子とかのけ者になったような子が毎週水曜日に来て、いろんな学年の子と遊ぶ。その1年間ですごく変わるんですね。だから、私たちの使命は終わっていないと感じています。続けていかなくちゃいけないと思っています。

そういうことと、各学校で毎年昔遊びをやっている。いろんな場所もいろんな機会もいろんなものも新宿区は子どもたちにたくさん与えているんですね。本当に幸せな区だと思うんですね。ただ、そこに出てくるのは残念ながら決まった子が多い。ひろばもそうです。ひろばに来て元気に遊んでいる子が多いんですが、ひろばに来ない、おうちにいる子どもたちはどうしているのかなといつも感じています。そういう子の親はやっぱり全然無関心で、だからそこに焦点を当てる必要がある。その子たちも来れるような居場所をつくっていかなくてはいけないのかなと。それはすごく難しいと思いますが。

だから、元気で集団遊びもできて、いろんなことができる子は安心だと思うんですね。た

だ、そういうできない子どもたちをどういうふうに。だから登録していない子たちはどういうふうになっているとか、そういうことも心配ですし、その辺焦点当てて考えていかなくちやいけないと思っています。

○委員

あとはひろばに、例えばボールとベースとクラブとバットを置いておいて、20人ぐらい子どもを連れてきたとき、そこで野球が始まるかと思ったら大間違いなんですね。全然違うんです。我々がそういうものを用意したからやってくれるものと思っていて、それが違った。そこに気づかないと、幾ら物をつくっても、幾ら先生をつくっても、何を買っても、子どもたちは見向きもしないと思う。本当に子どもたちって浮気っぽくて、これやったらすぐこっちってやってもらったらいいんだけど、教えてもらったことについては全部自分の感性と違うとそこに行かないから。

僕なんか一生懸命紙飛行機を折ってやったんだけど、全然見向きもしない。それよりも新聞紙を丸めてたたく音がおもしろいというんで、新聞紙を丸めて投げ合ったりなんかしている。

○福富部会長

そうすると、子どもに対する予防、次に、子どもに関わる大人の子ども観、子どもをどう見るか、そういうようなことも、大人に対する、お母さんも含めて、子どもというのは決してこれこれこうなんだと定義するのではなくて、要するに子どもというのは、子ども観、そういうものをきちんと伝えていくこともすごく大事なことです。そういう発想の中でひろばとか、そういうものを展開していけることになると少し違ってくるのかな。

何か我々大人たちが余りにもこういう子とこういう子とか、いじめでいうといじめる子といじめられる子。でもいじめられる子と一言で言うけれども、いろんなタイプのいじめられる子がいて、いじめる子だっていろんなタイプのいじめっ子がいるんだろうと思います。お母さんもそうだと思います。子どもをほったらかすお母さんもいるし、そうじゃないもの。いろんなタイプの人がいるわけですが、そういう中で子どもについていえば子どもとはどういう存在なのかをもう少し我々大人が学ぶ必要がある。その学ぶような場も用意することがこれから一つの指摘なのかな。

我々は余りにも子どもに対して、ありきたりのというか、子どもにとってよかれと思うことをやり過ぎてきた。よかれというのが一体何なのということをもう少し考えて見直す機会もあるのかなというのが少し柱になる気がするのですが、どうでしょう。

○委員

先生がさっきおっしゃった、池田小学校の事件があってからというのは一番大きいと思うんですよね。子どもをほっておけない。そこら辺に変な人が来る。今でも時々学校のほうからそういう情報が入りますよね。不審者が来たとか。私も田舎育ちで、それこそ杉の木の枝で遊んだりしたんですが、そういうのが一切できないじゃないですか。ですから、そういうところへ本当は連れて行って、何日間かほっぽり出して置いておきたいという気持ちはすごくあるんですよね。でも、今の子はすごく与えられて、それでやってみなさいと。私は今の子を見ると、自分の子どもが小さいときはそういうのは余りなかったんですよね。だから今の子はすごい与えられたのでそうやって遊んでいける子といけない子がいますけれども。

それともう一つは、子どもひろばで障害児が結構いらっしゃっているという話がありましたが、柏木の場合は障害を持った子の学級があるんです。だから多分、その利用者だと思います。よその障害を持った子がわざわざ来るんじゃなくて、その学校の中にそういうのがあるから。

○福富部会長

各学校であるんじゃないですか。

○委員

全部じゃない。

○委員

特別支援学級というのがありますね。

○委員

ちょっと趣旨とは離れるかもしれませんが、子どもが主人公だと言うんですが、意外と子どものことを学校の先生が子どもを頼っていないみたいなのがものすごくあります。特に中学校になると、やっぱりいじめられやすい子、いじられている子ってみんな見ているんですよ。だから本当は、例えばうちの娘とかは結構先生に相談されているんですよ。こんなことがあったみたいなんだけれども知っていると知られて、大概知っているから答えてあげているよという話を聞いたりするんですね。すごくいい先生ですよ。子どもたちのありのままの姿を自分がつかんで、一緒に何とかしようと思っている。ところが、子どもが一生懸命こうしたいということをぶつけても、全く反応しない先生もいっぱいいるんですね。

ちょっと難しいですが、いじめをなくすことを考えるときに、子どもたち同士がいじめをなくそうとする力を沸かせるような、子どもたちを信頼して、その子たちと一緒にどうやっ

たらいいかを本当はつくれないといけないと最近特に思います。

親もある意味先生に任せきりじゃないですか。先生に何とかしてくれと言ったって、先生だってアップアップなんだからできっこないです。親が本当に子どもを守るために、そいつを呼び出してでも、けんかを売るようなことぐらいやらないと守れない時代になっていると思うんだけど、何か行動に出ないですよ。その子の親に言ったって、子どもは何しているかなんて絶対知らない。うちでは大体いい子にしているんですよ。嫌なことを陰でやらせていたり、そういう子はいつもいる。それは決まった子じゃないです。入れかわり立ちかわりいろいろ関係が変わるので、微妙なんですけど、いますからね。だからやっぱり子どもたちが一番嫌なこととか何かよく知っているの、本当はその子どもたちにもっと率直に聞いて、キャッチボールしながら場をつくっていくのが大事な気がします。

○福富部会長

いじめに関して言うと、日本のマスコミ報道、メディアの扱い方がすごく偏っていると思いますよ。メディアが流す報道、それにある意味では乗っかって文科省がGメン云々という、非常に安易にいじめというものを、安易と思っていないんだと思うんですけども、いじめの構造を簡単につくっちゃうんですね。それに対してそれをどうするかということを、机上でばかりやっている。それが、文科省の非常に問題体質だと思います。だから本当にいじめの実態は何なのか。いじめって一言で言うと、こんなこと言うと誤解しないで聞いてほしいんですけども、極端に言うといじめってなぜ悪いんだ。じゃ、逆に大人がいじめしていないのかというと、もっと言うと、大きな構図の中でいじめをしているわけですよ。そういう構図の中を一方で放っておいて、子ども云々で何か事故があったということだけを極端にメディアが報道するという状況があるわけで、何かいじめの本質的なものは一体何なのかをだれも見ようとしていないですね、今の日本というのは。メディアに非常に踊らされている状況が多々あると思います。せめて新宿のこの部会、あるいは協議会の中では、その一つ本質的なところに気づくことの提言を一つでもいいから発信できれば、全国に対する素晴らしいものになるのかなと思いますけど、ちょっと大それたことでしょうか。

○委員

いや、そう思います。だから犯人捜しばかりやっているんですね。犯人捜しでたたけばいいということだから、あんなにたたいたって結局その子どもたち、学校の子どもたちは今何を思ってどんなふうに悩んでいるのかは何ら出てこないですよ。本当はその子どもたちこそ大事にされなきゃいけないのに、何かそのことはそっちのけですよ。変ですよ。

○委員

何か変ですよ。

○委員

本当に病んでいる気がします。

○福富部会長

実は次回、現場を実際に我々が見て、机上の論議だけじゃなくて、実際に現場はどうなっているのか。行くのはここでいうとひろばですか。

4 その他事務連絡

○事務局

冒頭、座長がお話しされていましたが、第1回目と申しましても全部で4回しかないということと、次回2回目に現場を見ていただいて、見た後に少しお話ができる時間を設けて、そのレベルである程度お考えをまとめていただいて、第3回目のときにそれを議論していただいて、ある程度そこでまとめていくと。4回目は予備の会合ということで、まとまった話がこれでいいのかどうか確認をしてもらいたいようなレベルになりますので、今回の1回目と2回目が結構、大変貴重な御意見がたくさん出たので、これをもとにしながらというふうに思っているんですが。

あともう1点は、確かに自然の問題ですとか、泊まりがけのキャンプだとかはどうなっているのかというお話がありましたが、そういう事業はいろいろ行っています。まさにプレイパークが公園での自然遊びということで、火を使った遊びですとか、木登りですとか、結構野性的な、まさに生きる力、体の感覚を身につける、ボールを投げたりくぎを地面に刺したりだとか、もちろん安全なルールを徹底した上で、ちゃんと見ている人がいる中でやるということですが、そういった体験ができるような遊びもちゃんとあります。

ただ、今回幅広くやるには余りにも時間がないので、今回、子ども総合センターから、資料としては児童館、学童クラブ、放課後子どもひろば、この3点の事業を見比べながらやっていると冒頭申し上げましたが、23年度に委員の皆様にご提言を出していただいた、生きる力を身につけていかなきゃならない、社会生活を営むのに困難を有する若者をどうして防げるのかというところで、もうなってしまった若い方については今、相談窓口を8月1日に開設ということになっているのですが、いろいろ対応していこうと思っています。

ただ、もう30歳を過ぎてそうってしまった方に対して、もちろん支援はしていきますが、

そうなる前にやったほうが効果的だということで、幼稚園、小学校、中学校というような若い世代、感性豊かな時代にできるだけカバーできたらと思っています。

小学生の中で弱いお子さんとか引きこもったお子さん、発達障害がある可能性のお子さんも現在受け入れていますので、そういったお子さんも含めて全体的にどうやっていったらいいのか。感性も豊かに皆さんに育ってもらいたい。弱者・強者の関係もある。そういう中で思いやりの心とかどうやって育てられるのかということも含めた、大人の子どもに対するかかわりを持って、伝承的な遊びですとか、体を使った遊びですとか、多世代、異世代、異年齢、それからもう一つ、多文化。そういったことも取り入れた中で、盛りだくさんになってしまいますけれども、生きる力を身につける形でのかかわりができれば、将来予防的な形になるのかなと思っています。

ただ1点、先生が冒頭から言われているのですが、いじくり過ぎ、いろんなものを用意し過ぎというのは、いろいろ御指摘を受けています。新宿区としてはこれがいいんだろうということを生懸命やっているつもりなんです。これはもちろん皆様方からの御意見だけでなく、保護者の皆様から直接いろいろ出てきています。もっと長時間預かってほしい、夏休みはもっと朝早くからやってほしい。ただ、これは先ほど御意見がありましたように、放任主義というんですか、余りに親が身勝手に、学校へ行かせて、その後の放課後も全部やってもらって、とにかく全部見てくれというような親御さんが多い中で、それは果たしてどうなのかという疑問を持つのですが、ただ、やはり一つは放任しておくよりは、親の教育が一番大事なんですけれども、でもそれができないのであれば、放任されておくよりはちゃんと見守りの目、関わる必要があると。

そんな中で、3事業のうちの放課後子どもひろばが、ある意味では、後から出てきた新しい事業で、出来立てでまだいじりやすいということと、もう一つは学童や児童館みたいに法令で決まったものでないので、まだ結構いろいろやり方を考えられるのか。特に学童クラブと比較しながらやるのは結構どうなのかなという思いもありまして、それで次回の、さっきの話になるんですけども、放課後子どもひろばと学童クラブの両方を見られる場所をできれば次回までに考えさせていただけたらと思っています。

○福富部会長

そういう状況で、今回は現場というか、実際に新宿区の中の一つになりますけれども、こういうことを展開していると。それを我々が見た上で、あれもやれ、これもやれ、こうしろという発想もそれはバツにしません。そういう発想もいはいけれども、それ以外にもっと原点

のところで、こういう視点が少しいんじゃないかとか、こういう視点を補うことがこれから大事ではないかとか、そういう提言ができればいいのかな。それを少し探る意味で、そういう意味では少しはすかしの目で現場を見てみる。それを見た上で会議を持てたらと思います。

そして、そこでうまくまとまればいいんですけども、なかなかまとまらないだろうと思いますが、その御意見はできるだけ受けた形でまとめをつくります。それを皆さんにすぐフィードバックしますから、そのまたやりとりもしながら協議会のほうに中間報告をまずする。それでまた協議会でいろいろ言われると思いますが、それを引き受けて、あともう一回部会を開いて修正。そして2回それをやった上で、報告書をという段取りです。だから忙しいといえは忙しい。でもきょう安心しました。いろいろな観点で意見が出そうなので、この調子で頑張れば何とかなるのかな。親も子どもも先生もメディアもやらなきゃいけない。大変だと思いますが、少し視点を絞ればと。でもきょうはとてもよかった。暑い中ありがとうございました。

○事務局

次回は8月30日です。

午後 4時00分閉会